



ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



雨に濡れてた たそがれの街
あなたと逢った 初めての夜
ふたりの肩に 銀色の雨
あなたの唇 濡れていたっけ



数年前、草刈正雄が主演している、広尾近くの納骨堂のCMがテレビに繰り返し流れていました。しかし、注目したのはそのBGMの方です。ご存知の方は少ないかもしれませんが、「黄昏のビギン」です。「上を向いて歩こう」の永六輔・中村八大コンビの作品ですが、実際には中村八大による作詞作曲だとか。何とも言えない味わいがCM自体の格調を高めています。非常にうまい演出です。



ももとは水原弘の歌ですが、有名になったのはちあきなおみのカバー曲からでした。そう言えば、ちあきなおみは今どうしているのでしょうか。彼女に関しての一番の思い出は、学生時代に見ていた紅白歌合戦です。この年は「ハイファイ・セット」が初登場だったこともあって下宿で一人寂しく見ていたのです。その時彼女が歌ったのが「夜を急ぐ人」という何ともおどろおどろしい曲。紅白のお祭り気分が一変しました。それまでの傍観者的な視聴者意識が吹っ飛んで、「なんだこりゃあ。」みたいな、「こういうのもありなのか」みたいな、形容しがたい気分を味わいました。それまで持っていた演歌歌手のイメージが完全に引っくり返され、彼女の歌唱力の凄さをまざまざと意識したのでした。

ついでに触れると、彼女の歌で絶対に忘れてはいけないのが「ねえ、あんた」という一人語り歌でしょう。幸薄い、それでいて可憐な面を失わない女性を演じる姿は涙ながらには聞けません。最近の、早口で自己主張を一気にまくしたてる歌や、じっくりという言葉がもはや死語になったのではないかと錯覚するほどに入れ替わり立ち代わり踊る歌が席卷している時代に、こういう情感あふれる曲は余計に心に沁みてきます。

今の時代、そういう歌を聞かせてくれる歌手は、中島みゆきだけになってしまったような気がします。最近よく聞く、BOSS缶コーヒーのCMバックに流れる「ヘッドライト～」やドラマ「PICU」の主題歌「俱（とも）に」、新作映画「Dr. コトー」主題歌の「銀の龍の背に乗って」を聞いていて、ますますその思いが募ります。



話を「黄昏のビギン」に戻します。「黄昏」と書いて「たそがれ」と読むのはどうしてなのか、気になります。もちろん当て字で、正しくは「こうこん」と読みます。「たそがれ」自体の語源は、夕方に薄暗くなった際に人の顔が見分けにくくなり、「誰だあれは」という意味で「誰そ彼（たそかれ）」からきています。



ではなぜ「黄昏」を当て字したのかということですが、「昏」は「日」と「氏」を組み合わせた会意文字です。「氏」は肉を切る小刀の形。氏族共餐の時、これで肉を切り分けるので、のち氏族の意に用いました。「日」の形の部分はおそらく肉塊の象形でしょう。氏族同士の結合（婚礼）など重要な儀礼や祭祀は、日暮れ時に行われたことから「昏」は「日暮れ」の意味になっていったと考えられます。「婚」は「女+昏」なので、「人生の夕暮れ」の意味かと思って一人爆笑したのですが、どうもそうではなくて、単に祝

宴が夕暮れ時に開かれたからだそうです。

「黄」には色の黄色のほかに「黄金」の意味がありますので、日暮れを表す「昏」に「黄」を加えることで抒情的な効果を狙ったのかもしれませんが。

ここで、触れておきたいのは、映画の世界でこの時間帯のことを「ゴールデン・タイム」「ゴールデン・アワー」と称することです。発想が似ているではありませんか。ついでに言うと、「マジック・タイム」「マジック・アワー」とも言います。こっちの方が主流かな。いずれにしても、日没前または日の出後に数十分程体験できる薄明の時間帯を指す撮影用語で、光源となる太陽からの光線が日中より赤く、淡い状態となり、色相がソフトで暖かく、金色に輝いて見える状態になることに由来しています。



三谷幸喜の作品に、そのままをタイトルにした「マジック・アワー」という傑作があります。誰にでも訪れるだろう「人生で最も輝く瞬間」をテーマにした喜劇作品です。とても面白いのでご視聴ください。そう言えば、「ラ・ラ・ランド」にも「マジック・アワー」が効果的なシーンで使われていました。こちらの映画も見どころ満載ですが、何と言っても冒頭5分間は長回しの逸品となりました。ここだけでも必見です。主演のエマ・ストーンは、ディズニー映画「クルエラ」も演じていて、芸の幅が広いなあと感じました。



脱線ついでに言うと、私が大学で映画を学んでいた頃、「アメリカの夜」というトリュフォーの作品を巡って、自分たちでも実践してみようということになりました。この「アメリカの夜」というのは、映画用語の中でも特殊な隠語で、「昼間に撮影した場面を夜間の場面のように見せる映画の技法」のことです。大体は予算の都合上、夜間に撮影することが難しい場合に用いられます。しかし、最近の映画で言えば、「マッド・マックス〜怒りのデスロード〜」では、一味違った使い方をしていたので、演出法としてはまだ可能性があるようです。



話を戻します。どうせやるんだったら、真昼に撮影するのではなくて、マジック・アワーに挑戦しようという暴挙に出ました。これは、街を走る自動車のヘッドライト、街灯、部屋の明かりが点き始める関係で、あたかも夜であるのように見える効果がより一層増すだろうと目論んでのことでした。学生にありがちなことです。経験不足で理屈ばかりが先行していますから当然の結果になりました。このマジック・アワーというのは、ほんの一瞬の時間帯であり、しかも、光の状態が目まぐるしく変化する関係で、余計な編集の手間が増えただけの、見るに堪えない作品で終わってしまいました。しかし、その後、おかげさまで、この手法を取り入れた映画に出会うと、目が覚める思いをすることになりました。制作人への多大なリスペクトを感じるようになったからです。



この時の映画制作ゼミのエピソードを綴った作品が、当時の指導教官であった柳町光男監督の「カミュなんて知らない」です。ここでは、映画を学ぶ学生たちの姿（自慢ではありませんが、モデルは私たちです。）を描きながらも、映画人へのオマージュに満ちています。例えば、冒頭シーンは映画「プレイヤー」と全く同じ展開で、設定だけを立教大学キャンパスに移しての長回しで撮影されています。当初は早稲田大学文学部キャンパスを想定して脚本ができていたのですが、「スーパーフリー事件」が起きて大学側が許可しませんでした。悔しかった思いは今も引きずっています。また、教授役の本多博太郎が顔を白塗するシーンは、映画「ベニスに死す」へのオマージュで、そのことを知らないとただ単に悪趣味な演出としか思えません。

「長回し」については、その後登場した「カメラを止めるな」や「1941」は、度肝を抜かれたというのが正直な感想です。「ここまでやるのか。」という、映画人の矜持さえ感じました。

今回の名言編は、名言でも何でもなく、筆者の好みである歌と映画の紹介に終始してしまいました。たまにはこういう息抜きも許してください。どうもすみませんでした。（終）